



お尻を上げて甘露を出すアブラムシとそれを食べるアミメアリ

校庭を歩いていると、アミメアリが茎に密集しているのを見つけた。よく見てみると、複数のアブラムシをアミメアリたちが取り囲んでいる。アリとアブラムシと言えば、教科書にも載っている「共生関係」の例としてとても有名な。「アブラムシは天敵であるテントウムシに襲われないようにアリに守ってもらう代わりに、甘い汁（甘露）を分泌してアリに与える。」というものだ。この微小な生物たちの関係を是非とも撮影してみたいと思ってみたものの、これがなかなか難しい。シャッターボタンを押してから実際にシャッターが下りるまでのわずかなタイムラグの間に、アリが甘露を持って行ってしまふのだ。アリよりも先に甘露を捉えたい…。かくして、甘露をめぐるアリとの競争が始まった。

アブラムシがお尻を上げ、甘露を出す素振りをした瞬間に今だ！とシャッターを切る。期待を胸に画像を確認すると、別のアリがレンズの前を横切っていて落胆する。それほどアリはせわしなく動き回っているのだ。また、そもそも対象が小さく、ピントの合う範囲もものすごく狭いから、タイミングが合っていたとしてもピントがずれていたりする。とにかくもどかしいのだ。そんな私とアリとの真夏の甘露競争が続き、時間を見つけては校庭に通う日々が続いた。そして、蚊に刺されすぎて腕が豆大福みたいになった頃（豆大福という表現は妻によるものである。うまいこと言うなと感心してしまった。）、ようやくまともな写真が数枚撮影できた。（まだ納得はしていない。）

さて、何度も観察を続けることで、アリとアブラムシの習性が分かってきた。アリは絶え間なく触角でべちべちとアブラムシを叩きまくって甘露をねだり（このしぐさはとてもかわいらしい）、促されたアブラムシは5分に一度くらいの頻度で甘露を分泌する。アリが執拗に叩き続けると、たまにアブラムシはイヤイヤといった感じで（本当に嫌がっているのかは分からないが）体を左右に揺らす。それ以外はじっと木の汁を吸っている。アブラムシはほとんど動かないので、アリの作業はいわば“収穫”で、アリはアブラムシを“栽培”しているんじゃないかとさえ思えてくる。

甘露が分泌されると、アリはまず触角で確認しているようであった。触角の微細な毛で甘露の存在を確かめているのだろうか。甘露を食べるのは早い者勝ちで、見つけたアリがさっと食べてしまうが、たまにアリ同士で口移しで分け合っている様子も観察できた。さすが社会性昆虫である。

天敵であるテントウムシがいる場合は、アリに守ってもらえるというメリットがあるだろうが、テントウムシがほとんどいないこの時期、絶えずアリに叩かれ続けているアブラムシはなんとも迷惑そうであった。



アリが触角で叩き続けると、5分に一度くらいでアブラムシはお尻から甘露を出す（矢印）



触角で甘露の存在を確かめる



すぐさま甘露を食べる。甘露分泌から1秒からないくらいの早わざだ。